

賽の河原のアラベラ

大橋 進一郎

1

Thomas Hardy は *Jude the Obscure* の初版の序で to tell of a deadly war waged between flesh and spirit ; and to point the tragedy of unfulfilled aims… (肉と霊との間に闘わされた壮絶な戦を語り、満たされざる宿願の悲劇を指摘する…) と述べている。このテーマの中心人物は勿論 Jude Fawley と Susanna Bridehead であるが、壮絶な戦と満たされざる宿願は Richard Phillotson と Arabella Donn を含めた四本柱の土表の上で演じられたドラマと解釈すべきであろう。

二人の主人公についての所見はすでに述べたので¹⁾、本稿では残りの人物の中アラベラに焦点を当ててみたい。フィロットスンが肉と霊の戦で見せた生き方は常識的な打算と彼一流の博愛主義に基いていた。後者は当時としてはユニークな、換言すれば、世論に糾弾されるべき生き方として存在価値が認められるが、全体から見れば、あくまでシュエの物語の脇役でしかない。一方、アラベラは官能的な人物に描かれており、ジュードと二度も結婚したり、ジュードの前妻という立場がシュエに精神的圧力をかけたりはしたが、肉と霊の戦には直接従事していない。その点ではフィロットスン同様脇役に過ぎないが、満たされざる宿願という見地からすれば、四者四様の生き方が綾なす中で、もっとも常識的な生き方を代表する存在に見える。つまり、この小説を夢物語にしない現実性をアラベラが保証しているのだ。

多くの小説がそうであるように、この小説も社会制度が抱える不条理との対決を軸に物語が展開する。特に19世紀から20世紀への過度期という価値観の転換期においては、個人が自分の将来の生き方を決める上で、この不条理と如何に対処していくかが問題になる。この点ジュードもシュエもフィロットスンも失敗者であった。ジュードは絶望のうちに病死し、シュエは因襲に屈して贖罪の念にかられ、生ける屍となって前夫の所に戻った。フィロットスンは自分なりに自分の生き方を貫くが、学位を取得して教育界の大物になる夢は捨ててしまった。

‘Well—don’t speak of this everywhere. You know what a university is, and a university degree? It is the necessary hall-mark of a man who wants to do anything in teaching. My

scheme, or dream, is to be a university graduate and then to be ordained...²⁾ (いいかね。このことはあちこちで話すんじゃないよ。君は大学が何だか知っているね。それに学位も。それは何か教職の仕事をしたいと願う者に必要な資格証明書なのだ。僕の計画、いや夢はだね、学士になり、それから聖職につくことなのだ…)

この夢を引き継ぎ、自分の生き甲斐にしたのがジュードの悲劇の始まりであった³⁾。しかし、アラベラは敗北者でもなければ、本質的にはジュードの悲劇との因果関係もない。彼女の生活も挫折の連続だったが、決して高望みはせず。分に応じた幸せを追求しただけであった。そして、何よりも環境に応じて遅しく生き抜く力を持っていた。これは、時代の変わり目を生きるに必要な処生術の象徴であろう。

古い世界では、庶民は社会的身分を変えようとはせず、職業も自営業のみならず雇用関係でも、世襲が普通であった。特に英国はこの保守的傾向の代表とされている。この階級社会の枠の中で悲喜交々の人生が展開し、枠を飛び出せば稀には成功者になれても、殆どは反逆者の烙印を押されてしまう。枠を動かしたり、取り替えたりするのは革命で、枠の徹廃は永遠の理想である。したがって、従来 of 秩序に固執する庶民の目には、ある意味で理想は革命より危険な物に映る。

このように見てくると、フィロットスンの場合、遠大な計画は諦めても、博愛主義を維持しながら校長の身分保全に成功し、曲がりなりにも自己主張に成功したと言える。これは妻の自由恋愛という当時の道徳律では許されない醜聞が、再婚という思いがけない解決により、救われた為である。つまり、枠からはみ出すタブーを冒さずに済んだのだ。シューは勿論ジュードもある程度の学識を持っていたが、何と言ってもフィロットスンは小学校の校長であり、世間に認められるインテリであった⁴⁾。それに反しアラベラは学問に興味がないどころか、これを無用の道楽と看做してジュードを悩ませるが、その生き方は既成の枠の中でいかに楽しく暮らしていくかという、庶民の生活そのものなのだ。この事はハーディの手法からも検証できる。

ハーディは前作 *Tess of the d'Urbervilles* でギリシア悲劇の手法を取り入れ⁵⁾、うぶな田舎娘が名門ダーバヴィル家の血を引く設定になっているが、『ジュード』でも一族の運命に関する記述がある。すなわち、父母の離婚、母の入水自殺、父の出奔、叔母の家出などフォーリィ家の者は結婚には向かないという噂である。この設定の違いが前者をトラゴディアー、後者をトラジェディにするのである。テスの場合「純粋な女」⁶⁾は王侯貴族の価値基準で表現した別名であって、庶民感覚で言えば「愚かな女」になりかねない。そのように解釈すると、アラベラは庶民感覚の「純粋な女」と言えよう。

2

アラベラとジュードの出会いはジュードが19歳の時であった。ラテン語やギリシア語の勉強に勤しむ傍ら、養親ドルーシラ大伯母のささやかなパン屋の手伝いをしていたジュードは、将来の

ことを考え、近くのアルフレッドストーンという小さな町で石工の従弟になり、下宿住いをしながら仕事を覚えて近隣の教会の修繕工事に従事していた。毎週土曜日は、夕方になると、大伯母の許に戻り二泊するのが常であったが、大伯母の頼みで製粉所を訪れるため回り道をして、アラベラに遭遇したのである。

道すがらジュードは大学生になった自分の姿を想像したり、出世して僧正になった時の収入を計算したり、夢を膨らませていた。豚の腸を洗っていた三人の娘が、そんなジュードにちょっかいを出した。豚の生殖器を投げ付けるなどして、最も積極的に近付いてきたアラベラを見て、ジュードは「What a nice-looking girl you are!」と咳く。アラベラは一気に日曜日の訪問の約束を取り付け、他の娘達に冷やかされる。その一人アニーはジュードのことをよく知っていた。アラベラは豚の生殖器を投げたことを悔む。

以上が二人の出会いの場面である。当時この辺の娘達にとって、結婚は最高の目標であった。アラベラは以前オールドブリッカム（レディングの仮名）で三ヶ月ほど居酒屋の酌婦をしていたことがあり、男のあしらい方は心得ていたが、所謂擦れっ枯らしではない。ジュードに近付いたのは、彼が若くてハンサムだからだ。職人だと分かると、忽ち結婚の相手として考え始めた。しかし、真面目で学問好きの男をどうやって口説き落とすのか方法が分からない。結局二人の友人や旅回りの薬売りヴィルバートの助言で妊娠したと嘘をつき、夫を手に入れることに成功した。

だが、結婚さえすればジュードを意のままに操れると思ったのは誤算であった。やっと手に入れた夫は、学問狂いが治らず、真面目だけが取り柄の退屈な男でしかなかった。アラベラは家を出て、やがて養豚業を諦めた両親と共にオーストラリアへ移住した。

数年後、アラベラはクライストミンスター（オックスフォード）の酒場で働いている中にジュードと再会する⁸⁾。アラベラの話ではシドニィホテルの支配人をしていた男と正式に結婚したが、折り合いが悪くなり逃げ帰ってきたらしい。その男が追い掛けてくることを頻りに気にしていた。しかし、実際には必要に応じて連絡を取っていたようだ。アラベラの話には嘘が多いので、事実関係の確認は難しい。小説の筋に従えば、やがて夫カートレットがロンドンに移住してきて、二人は元の鞘に収まってしまった。オーストラリアで正式な結婚、すなわち重婚をしたというのは嘘であった。アラベラの口振りでは、重婚なんて全然問題にしていけないように聞える。とは言え、正式の結婚が彼女にとってどういう意味があったのかは一考を要する問題であるが、このことは後述する。

正式な結婚はこの小説のキー・ワードの一つである。しかも、ジュードとシュアの結婚を前提としてフィロットスンとシュア、ジュードとアラベラの離婚が成立し、結局前提にしていた結婚は法的には成立せず、離婚した夫婦がまた同じ相手と再婚するという、皮肉な結果に終るのである。これはハーディ好みのコントラストであろう。

アラベラがロンドンに戻ってきたのは、ジュードと縊りを戻すためではなく、またカートレッ

トと正式に結婚するのに必要なジュードとの法的離婚のためでもないことは確かなように見える。成り行き次第で柔軟な対応を見せるのが彼女の生き方なので、長期計画を練っていたとは考え難い。カートレットはラムベスで酒場を開店し、羽振りがよかった。アラベラの目論見が何であったにせよ、裕福な紳士を夫にすることが出来たのは幸せであった。それに再婚の障害になると思われた息子をジュードとシューに押し付けることに成功した。アラベラの話では、ジュードが父親ということだが、これも例によって真偽が定かでない。しかも、この子がジュードとシューの間に生まれた子供達を道連れにして無理心中を遂げ、シューに決定的打撃を与えたのだ。その際のアラベラの対応は冷談とは言わないまでも、御座なりに見える。

このように順風満帆に見えたアラベラの再婚も、夫の急死により、あっ気なく終止符を打った。遺産の酒場は夫が亡くなってみると大して利益は上がらず、現金はすべて父の商売に注ぎ込まされてしまった。母が亡くなり、父は帰国していた。クライストミンスター郊外にあるジュードの下宿に転がり込んだアラベラが選んだ次の目標は、何と最初の夫ジュードであった。その結果は次の科白がよく言い表わしている。

‘I’ve got a bargain for my trouble in marrying thee over again!…Why didn’t you keep your health, deceiving one like this? You were well enough when the wedding was!’⁹⁾ (あんたともう一度世帯を持とうと骨折った掲句、大したものを背負い込んだじゃった。どうして健康を損ねたのよ、こんな風に人を騙してさ。結婚式の時はずっと元気だったじゃないの。)

アラベラの期待はまたも裏切られた。今度も夫の死に水を取る破目になった。自分なりの方法、つまり結婚することで、ささやかな幸せを掴もうとした努力はすべて水泡に帰した。でも、アラベラの生活は果して不幸であっただろうか。次に、この問題を考察してみたい。

3

これまでの観察から『ジュード』の主な登場人物の中、三人は性格が内向的で、一人アラベラのみが外向的だと言えよう。したがって、人間関係の性格的対立が3対1の割合で保たれていることが彼女の存在を特徴づけている。これはフィロツスンの校長という知的身分が他の三人と対立関係にあることと対比するものである。特に題名の主人公ジュードの生活に大きな影響を与えた女性二人を較べてみると、シューとアラベラはこの関係の対極に立つと言ってよい。更に、ジュードとシューの会話はギリシア神話や旧約聖書を踏まえて理解されねばならぬ場合が屢々あり¹⁰⁾、アラベラとジュードの極めて世俗的なやりとりと好対照をなしている。そして何よりも、社会秩序からの疎外性の容認は、前記二人に加え、フィロツスンにも当て嵌る¹¹⁾ことだが、アラベラが常にこの秩序の中で、不特定の仲間と共に面白おかしく生きて行くタイプの人間であることに注目したい。

このように見てくると、作者の意図が奈辺にあったのか推測できるのではなからうか。シュー

のモデルはおそらくトリフィーナ・スパークスであろう¹²⁾。学問指向という点はジュードもフィロットスンも同じタイプである。したがって、現実の世界という背景を絶えず意識させておくためには、非学問指向的人物の存在が必要になる。これが無いと、小説から現実性が失われるだけでなく、庶民の向学心が社会からの疎外を招くという、この小説のテーマの土台が揺らぎかねない。

アラベラのモデルについては不明である。恐らく、ハーディの創作であろう。『テス』の場合、端役ではあるが、農場主グローヴィや女労働者カーなどがこの役割を果しているが、テーマに学問指向の疎外性はなく、純粋な女の悲劇を語るドラマであった。つまり、世俗性は小道具にはなっても、問題の本質とは直接関係がなかった。しかし『ジュード』では、理想と現実のギャップが舞台装置そのものなのだ。こうして、アラベラが生まれたのである。

ジュードと初めて結婚した時、アラベラは夫の石工としての腕に期待をかけ、学問には何の価値もおいていなかったが、皮肉なことにジュードが大学の学寮長から得た助言は「石工のままにいる方が成功の望みは大きい」¹³⁾というもので、アラベラの意見と一致している。つまり、アラベラの人生観は最高学府の権威者さえも支持してくれる、常識に叶ったものであった。これでは、当時の学界の常識に従うと、内向的人物が理想を追い求める空想的進歩主義者で、外向的人物が常識的保守主義者という結論になってしまう。

アラベラは肉感的な美人だが、頭の回転が速く、実行力に富む素質に恵まれていた。常に生活力の限界を心得ており、自分が最も必要とするものは経済的に後ろ楯となる存在つまり夫であると考えていた。これは当時の庶民が求める理想であっただろう。その意味では、ジュードやカートレットを手に入れたことで、アラベラの宿願は満たされたと言ってよい。しかし、目標は達成したものの、その後の展開は果して幸福だったのか不幸だったのか、更に考察を続ける必要がある。

4

すでに述べた通り「フォーリィ家が結婚に適さない」という運命は、シューの形而上的アラベラの形而下的という二つの結婚観を軸にジュードの人生を翻奔した。つまり、この小説は理想という観念的テーマに欠ける具体性や現実性を補完するために、アラベラの通俗的な生き方が重要な役割を果して、全体の均衡を保っているように見える。そこで、通俗的な庶民、時に女性の幸福とは何であったのか、この小説の示唆するところを探ってみよう。

庶民の娘が夢見る最高の結婚とは、玉の輿に乗ることであっただろう。おそらく現代でも同じであろう。しかし現実的見地からすれば、若くて男前で真面目な職人も逃すことのできない目標である。アラベラはオールドブリッカムの酒場で働いていた経験があり、男を見る目は持っていた。したがって、常識的に正しい選択をしたと言える。しかし、既述の通り、ジュードに愛想を

尽かし、家を出てしまう。カートレットとの結婚も紆余曲折があった。同棲はしたものの、既に述べたように何等かの経緯があって単身帰国すると、偶然に出会ったジュードとその晩駅前の安宿に泊った。翌朝、アラベラがオーストラリアで結婚したと言い¹⁴⁾、ジュードが正式な結婚かどうかを確かめると、肯定したがこれは嘘だった。嘘とは気がつかないジュードは、昨夜の行為は不倫にあたるのではないかと心配するが、アラベラはまるで気にしない。

確かに、この段階ではアラベラの気持は全く自由で、ジュードも新しい夫探しの候補者の一人だったように見える。しかし、その直後にカートレットが帰国して、ロンドンのラムベスで酒場を手に入れ、彼女を探し求めていることが分かると、忽ち縊りを戻し、ジュードに邪魔をしないよう手紙を書いた¹⁴⁾。彼女の倫理観から見れば、彼女の行為に若干不当な点があったとしても、これは道徳の許容範囲内のこと、つまり常識であり、換言すれば、人間誰しも同じようなことをしているというものだ。またジュードに対しても、手紙一本で協力が得られるという信頼感を持っていた。彼女の考え方は正しかった。その結果、安定した裕福な生活が得られたのだ。更に幸運は続く。

偶然にもジュードと利害関係が一致し、彼との離婚が法的に成立した。そして、カートレットと今度は正式に結婚する。オーストラリアでの同棲、ジュードとの一夜など、アラベラの性に対する考え方には締りのないところがある。しかし淫蕩な女ではない。ただ、結婚の可能性を前提としているだけだ。それも、法的に正式な結婚を、である。その理由はシューに対する彼女の科白に要約されている。

‘Life with a man is more business-like after it, and money matters work better. And then, if you have rows, and he turns you out of doors, you can get the laws to protect you, which can’t otherwise, unless he half runs you through with a knife, or cracks your noddle with a poker. And if he bolts away from you — I say it friendly, as woman to woman, for there’s never any knowing what a man med do — you’ll have the sticks o’furniture, and won’t be looked upon as a thief.…”¹⁵⁾ (男と同棲するのは、出来ちゃった後じゃあ事務的になっちゃうの。それで、お金の方が物を言うようになるのよ。それに、知っているかしら、大喧嘩でもして家を追い出されても、あなたは法律に守ってもらえるのよ。結婚してなきゃ、そうはいかないんだから。そいつがナイフであなを刺したり、火搔棒で頭を叩き割ったりしない限りはね。それに、もし男があなから逃げ出したら—女同志の誼で言うのよ、男というのは何をするのか判らないからね—あなたは家財道具が丸ごと手に入り、しかも、泥棒扱いされることはないもんね。)

つまり、男と一緒に暮らす利益は、煎じ詰めれば、金である。正式に結婚していれば、たとえ夫と喧嘩別れをしても、妻の権利を法律が護ってくれる。というのだ。

アラベラは三度結婚したが、思惑はすべて外れた。彼女にとって結婚は豊かな生活の手段であった。これを幸福と呼ぶべきか、不幸と呼ぶべきか、最後にこの問題を取り上げてアラベラの生

き方の評価としたい。

ジュードを巡る二人の女性の行動は対照的である。アラベラの人生観からすれば、シューは沈みかけた船を見捨てた鼠である。そんな女にいつまでも未練を残す、病弱で、役立たずの夫を背負い込んだ。ジュードはアラベラにシューへ手紙を書くよう頼む。果してその手紙が投函されたかどうかは不明だが、ジュードは一人でアルフレッドストーンへ行き、雨の中を5マイルも歩いてシューに会い、駈落ちを迫ったが、断られる。だが、ジュードは一目シューに会い、それから死ぬというのが最後の願いであった。こんな夫の面倒を最後まで見なければならぬとは、とんだ貧乏籤を引いたものだ。しかし、少くとも妻としての義務は果たしたのである。

勿論、法律や世間体を気にしていたかも知れないが、彼女の行動には僅かながら愛情が感じられる。妻としてまた母として、立派とは程遠いが、あの環境では人並みと言えよう。正確には、常識の許容範囲に留まらざる悪妻というべきか。これがハーディの設定した庶民の生活規範であろう。

さて、宿願の見地からすると、小説の最後で、アラベラが船の沈んだ後の身の振り方をしっかり考えていたことに焦点を当てたい。もう若くはなく、容色も衰えてきたので、高望みはせず、身近のヴィルバードに狙いをつける。この執念にも似た結婚願望がある限り、彼女の人生は幸福なのだ。寮の河原で小石の塔を作ろうとしても、地獄の鬼に壊されてしまう亡者の子供は、最後に地藏菩薩に救われた。父母の供養を自分の幸せ、小石の塔を結婚に置換えれば、アラベラの姿が彷彿しよう。信念を貫く行為そのものが幸福の象徴なのである。

<注>

- 1) 拙小文「ジュードの悲劇性について」麻布獣医科大学教養部研究紀要第13号, 1980, pp. 55~71; 「イギリス小説に現われた女性像—テスとシュー」英米文学に反映された女性問題, 城西大学女子短期大学部文学科昭和58年度奨励研究, pp.21~41; 『十九世紀のイギリス—小説にみる世相』城西大学学術研究叢書10, 1992, 第四章幻想の悲劇, ジュードの生き甲斐, pp.73~99参照
- 2) Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, 1-1, p.34
- 3) 「ジュードの悲劇性について」p.58, および「幻想の悲劇」参照
- 4) 4人の主要人物の中、フィロトスンだけが殆どリチャードではなく苗字で語られている。これは校長という肩書が他の3人とは違う身分を示すと同時に、3人に共通な世界の埒外にあることを示すように見える。
- 5) 拙小文「テスの悲劇—ギリシア悲劇の立場から見た考察—」中央英米文学第12号, 1978, pp. 29~40参照
- 6) *Pure Woman*, 『テス』の副題
- 7) *Jude*, 1-6, p.64
- 8) *Ibid.* 3-8, p.198

- 9) Ibid. 6-8, p.390
- 10) 例えば *Jude*, 5-4, p.296
- 11) 「ジュードの悲劇性について」 p.62参照
- 12) Robert Gittings: *Young Thomas Hardy* (Heinemann, London, 1975) Chapt.11 Tryphena and the Sparks, pp.162~181参照。ハーディはトリフィーナの姉マーサに求婚して断わられたことがあるので、この姉妹をモデルにしてシューを造ったとも考えられる。
- 13) *Jude*, 2-6, p.138
- 14) Ibid. 3-9, pp.202-203
- 15) Ibid. 5-2, p.283

使用テキスト

Thomas Hardy, *Jude the Obscure*, Macmillan London, 1974

<主な参考文献>

Robert Gittings, *Young Thomas Hardy*, Penguin Books, 1978

F.E. Halliday, *Thomas Hardy, His life and Work*, Panther Books, 1978